

「戦後社会制度とキリスト教 1945-60」研究会

敗戦直後の地方のキリスト教—長崎の場合

原 誠

1. はじめに

われわれの課題は、敗戦直後の日本の地方の教会がキリスト教信仰を基として敗戦をどのように受け止め、それがその後の教会の有り様にどのような変化を与えたかを検討することである。教会は地域にあり、戦災にあった教会、そうでない教会などそれぞれに多様な歴史を刻んだ。多くの教会が『100年史』などを出版している。これらを念頭に置きながら、ここでは地方のキリスト教の働きとして長崎の教会、学校などを取り上げてケース・スタディを行う。長崎の場合、いうまでもなく原爆の被害を受けた。この状況のなかでキリスト教(界)はこの時期をどのように受け止めたのだろうか。

戦時下と戦後の教会を明確に分けたことがらの一つが礼拝の式順に表れる。「国民儀礼」である。これを紹介しているのが『霊南坂教会 100 史』である。これによれば 1942 年 12 月 17 日に教団総務部長名で通達が出され、霊南坂教会での「国民儀礼」の開始は 42 年 12 月 16 日の朝礼拝からであった。その内容は、宮城遙拝、君が代斉唱、神社参拝をさした。具体的手順は以下の通りである。1、鐘鳴る 会衆起立、不動姿勢を取る 2、教職者入場、3、鐘止む 会衆右向け宮城を向く 4、国歌奏楽 総員最敬礼 5、キーミーガーアーヨーオーハーまで済むと総員直れ、上体を起こす 6、国歌奏楽中 そのまま黙祷(出征軍人傷痍軍人戦没軍人並遺族の為、又大東亜戦完遂の為め) 7、国歌奏楽終る 会衆左向け 8、教職者着席 9、会衆着席 10、礼拝開始奏楽始まる¹⁾。これが宗教団体法下の教団の礼拝の方法で全国の教会はこれに従った。

戦時下の教会の有り様についておそらく戦後の最も早い時期に記されたのが、それでも戦後 14 年後に出版された安藤肇の『深き淵より—キリスト教の戦争経験』²⁾(1959 年、長崎キリスト者平和の会)であろう。安藤肇自身は戦時下と被爆の長崎を体験したわけではない。彼は 1952 年に青山学院を卒業後、後述する長崎平和記念教会の第 2 代牧師、日本人としては最初の牧師として赴任した。その意味では戦後第一世代の牧師である。彼はその後「長崎キリスト者平和の会」に参

加するなどキリスト教会の戦争責任について発言した人物である。彼にとって問としたことはキリシタン時代に多くの殉教者を出した長崎が、この戦争にどのように向き合ったのかというものである。それを要約すると、敗戦はそれまでの「帝国の権力」が消滅したが、敗戦の翌日から「今まで言うべくして言えなかった私たちの信念を、あらん限りの力をこめて語ったであろうか」と述べ、戦時下の信仰者の有り様を告白する。そのなかでは「今や敗戦によって、帝国の権力は音をたてて地に墜ちたのである。もはやわれわれをおどし、捕え、処罰するものは消え去ったのである。では私たちは敗戦の翌日から、今まで言うべくして言えなかった私たちの信念を、あらん限りの力をこめて語ったであろうか。もし私たちが敗戦と同時に、卑怯であった自分の罪を心から悔いて、あらん限りの力で自己の信念に従って行動しかならば、第二列の恥辱の万分の一もそそげたかもしれない。しかし事実はそうではなかった」³と述べ、活水学院の職員の敗戦の翌日の記録を取り上げ「敗戦の翌日の活水学院はなんらなす所もなく、職員会議すら開けなかった」⁴とし、これまで「軍国主義に対して、戦争に対してはげしい批判を内心に持ちつづけてきたならば、敗戦の翌日にはただちに職員会議を開くべきではなかったろうか」⁵と。そして「敗戦後も勅語や御真影はいともていちょうに取り扱われた」⁶と記す。続けて「旧約聖書の昔から、モーセの十戒の時から、いっさいの偶像崇拜とはげしく闘い、信仰の純潔を守ってきたキリスト教、そのキリスト教主義の学校が、共産党ですら天皇制廃止をさげんでいる時、なぜかくもていちょうに一枚の紙をはこばなければならないのであろうか」⁷と指摘し、今度は占領軍が与えた自由とその教育も「これはすべて上からの命令によって与えられた自由であった」、「われわれは十分に活用することができなかった」⁸と指摘する。

この時、われわれが留意しなければならないことは安藤が記すように敗戦によって「帝国の権力」の消滅を、当時の教会がこれらをどのような体験として受け止めたのかということである。祖国日本の敗戦ということと信仰によって生きるということの中における「連続」と「非連続」をどのように受け止めたのか、ということである。

2. 地方教会の事例—教会史、教会資料から

それでは各地に存在した教会は、戦時下と戦後のただなかを過ごした信仰者にとってその経験は教会史のなかでどのように記されているか、筆者が参照できたいくつかの教会史から検討してみる。

『高知教会百年史』⁹は、1945年7月1日の礼拝では「皇紀2065年」と記し、礼拝は「国民儀礼」から始まっている。説教題は「祈によらざれば」、祈祷（特に祖国必勝のために）とある¹⁰。高知教会は7月4日の空襲で会堂、付属建物は全焼した。戦後の1945年11月4日に占領軍が焼跡の高知に進駐してき、12月25日のクリスマス礼拝の出席は270名、その前の礼拝出席は30名、元旦礼拝は51名の出席とある¹¹。「儀礼」については記されていない。

群馬県の『原市教会百年史』¹²には1945年になると「紙不足のため週報用紙が無くなり・・・」という状況になり、敗戦直後の8月20日の礼拝は大詔奉戴日であり、柏木隼雄牧師は礼拝で「舌を制せよ」と題して説教し、夕拝後必勝祈祷会を執行した。出席14名とある。また21日に柏木牧師は吾妻方面に出張し、中之条教会、原町教会、名久田各教会を問安し、集会、説教を通して祖国再建を訴えて回ったと記されている。12月20日にはアメリカ進駐軍従軍牧師ヒクソン大尉が原市国民学校で講演とある¹³。「国民儀礼」についての記述はない。

同じく群馬県の甘楽教会には当時の週報が残されている。それによれば1945年2月18日に「戦時宗教報国会」が開催されたこと、2月25日の礼拝には「国民儀礼」は記されていないがそれ以外の週報には「国民儀礼」が礼拝の冒頭にあり、敗戦直後の8月19日、26日、9月9日の週報にも「国民儀礼」が掲載されており、週報自体に「敗戦」の記述はない。この日の週報には「昭和20年8月15日、この日が厳然たる歴史的事実であること、この日が悲哀の日か、希望の日か、今後の覚悟次第。直視することができない卑怯者は悲しめ。反省し得ぬ者は憤れ、国民一般に敗戦の何者であるかが分かっていないらしい、あるものは狼狽し、あるものはよそ事。極端なる解放がおこなわれよう」と記され、なぜか9月16日の週報には「国民儀礼」にかわって「皇居遥拝」とある¹⁴。以下、しばらく欠号で、11月25日の礼拝も「国民儀礼」にかわってなぜか「皇居遥拝」とあるが週報に説明はない。

先に「国民儀礼」について紹介した霊南坂教会百年史でも戦後の教会の転換について直接週報などからは示されていない。

以上、限られた教会史や教会資料から明らかにすることは、戦時下になされた「国民儀礼」がキリスト教信仰にとってどのような信仰的理解に基づいてなされていたか、自覚的であったかどうかが明確ではなかったといえよう。この状況は管見によれば全国の教会において等しく見られたものであろう。

教会においては礼拝の中で「国民儀礼」がなされ、他方、キリスト教学校にお

いては安藤が記しているように「御真影」への取り扱いが問題となった。

3. 長崎という地域のキリスト教

本稿では地域としての長崎を取り上げてケース・スタディを試みるが、その前提として長崎のプロテスタント教会(界)の概略を『キリスト教歴史大事典』の「長崎」の項目からを述べる。

切支丹高札撤去後の1874年12月に長崎公会(*長崎教会)が設立され、その後東山学院も設立された。これらがのちの一致教会鎮西中会を構成する母体となった。またメソジスト派は、73年デヴィソン, J.C. 宣教師が長崎に到着し、76年出島に出島美以教会を創立し、81年に鎮西学院を、続いて活水学院を設立した。出島教会はのち長崎中央教会、さらに長崎銀屋町教会となった。バプテスト教会の伝道は96年から、聖公会は77年長崎に聖アンデレ神学校を開いて神学教育をしたがこの学校は83年に閉鎖された。キリシタン以後、カトリックが強い長崎で、プロテスタント諸教派はいずれもミッション団体が教会と学校を設立して伝道がなされた。

宗教団体法によって成立した日本基督教団九州教区長崎支教区のうち長崎に存在した教会は以下の通りである。長崎教会、長崎古町教会(以上1部)、長崎銀屋町教会、長崎東山手教会、城山教会、長崎鮑ノ浦教会(以上2部)、長崎馬町教会(3部)、長崎勝山教会(4部)であった。

プロテスタントのキリスト教系学校はともにメソジスト系の活水女学校、鎮西学院があった。鎮西学院は原爆によって壊滅状況になり、その後諫早に移転した¹⁵。

4. 長崎の連合軍による統治の始まり

原爆を体験した長崎は、原爆の被害と敗戦に続く占領軍の統治の始まりをどのように記述しているかスケッチする。以下『ナガサキは語りつく』(長崎市編長崎国際文化会館監修、1991年)の記述による。

広島と長崎に投下した原子爆弾について、1945年9月5日にイギリスの新聞『デーリー・エクスプレス』がその現地報告が掲載された。これによって初めて原爆による被害の実情とともに、生き残っている人びとがいまだに死んでいっていることの恐ろしさが報じられたが、すぐにアメリカの原爆災害調査団は記者会見によって放射能障害による原爆症患者の存在を否定し、その後19日にGHQ(連国軍総

可司令部)からプレスコード(報道管制)が正式に指令され、原爆災害の報道はまったく姿を消すことになった。

一方、連合軍艦隊の長崎入港は9月2日から始まった。その数は20数隻。全国各地で解放された約一万人の捕虜を引き取り送還した。9月23日から26日にかけて進駐車の第一陣3350名が長崎港に上陸した。爆心地付近の駒場町の焼け跡では小型機の飛行場を建設中にブルドーザーが工場の残骸をかたづけるたびに白骨が現われ、道ゆく人びとも思わず合掌して冥福を祈ったという。

市民のなかには長崎市外へ避難する人もつづいたが、大部分の人は来たるべきものがきたという思いで、緊張と不安はおおうべくもなかったが、比較的平静だったとしている。

また長崎は中国大陸と最短距離にあり、古くから国際都市でありキリスト教布教の根拠地でもあったことから、戦前から外国人居住者は多く戦時下で制限があったとはいえ、被爆の日に長崎にいた外国人は少なくなかったと考えられる。しかし、その外国人被爆者数は今日にいたっても、推定の域を出ない。

外国人被爆者のうち、もっとも多いと考えられるのは朝鮮人被爆者である。終戦時には、全国では約200万人前後、長崎県内に約6万人、市内に1万2000から1万2000人が居住していたといわれ、このうち単純に被爆による推定死亡率をあてはめると、爆心地から2.5キロメートル以内の死亡者数は約1400～2000人とされている。1972年に韓国原爆被害者協会は長崎の朝鮮人原爆被害者数を2万人、そのうち死亡者を1万人と推定し大きなくいちがいが生じている。さらに「創氏改名」によって強制的に日本人名をつけさせたことなどもあり日本人被爆者のなかに数えられてしまった人もいる。

その他の外国人被爆者については華僑600名といわれており、そのなかに、かなりの被爆者がいたと推定されている。台湾からも就職、留学 長崎医科大学では23名の台湾出身者の爆死が確認されている。中国 長崎で約650名、うち死亡者は156名と推定され爆心地から約3.5キロにある修道院「聖母の騎士」に抑留されていた230人の外国人修道女が、また爆心地から1.7キロメートルの福岡俘虜収容所第14分所にはイギリス人、オランダ人、アメリカ人、オーストラリア人がおり、原爆被爆当時、170～200名ほどが長崎にいたとされ大半は重軽傷、被爆死、8名が確認と記されている¹⁶。

長い引用であるが、ここには原爆の被害、敗戦と連合軍の進駐、原爆災害調査団とGHQ(連国軍司令部)によるプレスコード(報道管制)、長崎の市民にの

みならず外国人の被災者に言及するなど、さまざまなことを簡明に説明している。

また『長崎市政 65 年史』（後編）、昭和 34 年 3 月 31 日には「占領軍統治」という章のなかの「終戦と進駐」という項目のなかで、以下のように記している。

（1945 年）9 月 11 日、連合軍側は九州地区で解放された約 1 万の連合軍将兵（俘虜）引取りのため病院船へブン号外輸送船・巡洋艦 1 隻・駆逐艦 3 隻・空母 1 隻等が長崎に入港し、へブン号は同日出島に接岸した。同船入港に先立ち米軍第 6 軍付属俘虜引取医院長、大佐、同第 5 軍軍医部長一行が来着とあり、素早く占領地への進駐をすすめた。そして進駐の円滑化のために、1945 年 9 月 21 日内務部内に外務課を新設し、同月 23 日、ハント少将麾下の連合軍進駐部隊特別陸戦隊第 2 師団第 6 連隊一部は正午大型輸送船 20 数隻をもって長崎に入港し午後 2 時から上陸、同夜は活水高等女学校・海星中学校に分宿した。この日長崎地区進駐舞台指揮官ハント少将は長崎連絡委員会委員長永野県知事・谷口中将・豊島大佐他各委員を招致し、「降伏条件を遵守し確実に実行すること、具体的指示は追って発令する、調査報告の提出は正確を期するよう」総司令部の命令を伝達した。進駐軍兵士の表情は意外にも明るく不安定な気持を抱いていた、市民の面持も狼狽はなく、澄みきった秋空のもとに当然迎えられるべくして迎えた平和な印象であった。このように記され平和裡に戦後が始まったことを記している。市中は平靜そのもので行交う市民の顔にも動揺の色もみられなかった」¹⁷。

共通して記していることは、長崎の市民は、原爆の被害と敗戦を「緊張と不安はおおうべくもなかったが、比較的平静だった」、「平和裡に戦後が始まった」、「市中は平静そのもので行交う市民の顔にも動揺の色もみられなかった」¹⁸ とある。

5. 占領軍・チャプレンと長崎の教会・キリスト教学校

最初に長崎市内のキリスト教学校とプロテスタント教会は原爆投下によってどのような被害を受けたか、『活水学院百年史』の記述を中心に記す。

鎮西学院は、爆心地からわずか 500 メートルの位置にあり建物は倒壊し、原爆による犠牲者は教職員 5 名、生徒 102 名（正確な数不明）、その他教職員の家族 30 名であった。倒壊した校舎に変わって長崎銀屋町教会が校舎として使用され、爆風によって倒壊に瀕した教会堂は鎮西学院の手によって修理された。のちに鎮西学院は諫早市に移転した。

活水女学校は生徒 80 名、職員 9 名の生命が失われ、校舎も甚大な被害を受けた¹⁹。

城山教会は壊滅し、長崎銀屋町教会は爆風によって倒壊に瀕した。長崎教会は4名の犠牲者を出し、会堂も甚大な被害を蒙った。飽ノ浦教会は原爆投下以前に建物疎開によって破却されていた。長崎馬町教会と長崎古町教会はともに爆風によって大きな損傷を受けた²⁰。

このような状況で戦後をむかえた長崎の学校と教会について述べる。

戦後をむかえた長崎の教会や学校について出版されている歴史に関して、戦時下の「国民儀礼」「教育勅語」「御真影」の取り扱いについては、1、はじめに、で述べた活水女学校が戦後も「御真影」を丁重に取り扱ったと記しているが、「御真影」は県庁に返還し、「教育勅語」は県立高女に預けたとある。活水女学校では戦時下でも課外活動として毎日礼拝は守られ、修養会、組会、卒業礼拝も持たれていた。しかしそういう機会に説かれた説教ないし講演はどういうものであったか何も記していない。

こうして迎えた敗戦直後に『長崎新聞』の記事として、活水女学校では1945年9月28日の日曜日の午後にキリスト教を通して日米信者の初会合が催され、「進駐軍からは特に第二師団から指定されたエルフリッジ・W・バートレイ中尉をはじめ海軍牧師のクラーク・リチャード・クーパー師、ゼームス・L・ストパール師の3名、日本側からは武藤活水高女校長を始め4人の牧師それに篤信の信者等が対応し、話しは日本の基督教が戦争中に受けた影響、日本における基督教の将来、基督教を通じた日米の友好親善について等尽きぬ信仰の話題が恩讐を越え、民族の垣を打ち除いてお互いの胸と胸に交ふ温かい信仰への誠をもって語り続けられた」²¹とある。その雰囲気は「記念すべき再会の時」であったとし、彼らが長崎に原爆を投下した当事者であったにしても「彼らに対する反発と憎悪は目立ったものではなかった。むしろ、戦時中に活水女学校および長崎市内の教会に集うキリスト教徒は、軍部に弾圧された被害者であって、敗戦による解放はアメリカがもたらしてくれた恩恵でもあったのである」²²と記している。続いてその年のクリスマスについても以下のような記述がある。「活水高女の演奏会 連合軍将兵にクリスマスプレゼントの一つとして21日夜元三菱会館で活水コーラス団の演奏を行ひ翌22日は3時から同校講堂でフープ、レスキー、ディクソンの3将兵も出演してクリスマス大演奏会を開くことになった」と、そして「ここには敗者と勝者の区別はないだろう。その意味で理想的な交歓がここにはあった」²³。長崎再建の出発点にこのような光景があった。

活水女学校では敗戦後2年目にして式典で軍政府からの祝辞が読まれた。当時

の軍政官は陸軍大佐ビクター・E・デルノア。代読者のニグロ氏とは長崎軍政教育官ウィンフィールド・P・ニグロのことであり、彼の任務の一つは長崎県下の小学校を訪れて、子供たちを前にして民主主義をわかりやすく解説し、軍国主義的・封建的な古い日本の教育を一掃することであった。また1946年8月に来日した宣教師カーブ氏が訪れ、活水関係者と懇談し、活水側からは以下の要望が出された²⁴。

- 1、派遣を希望する宣教師数5、2、その住宅、暖房のこと、3、梅香崎校舎建築のこと、4、校地拡張の件、5、パイプオルガン・ミシン・図書・標本・教具寄贈の件、6、教員優遇の件²⁵

このように活水と米軍関係修復への歩みは戦後直ちに開始されたが、戦後長崎の復興は長崎市に設置された米国軍政府の力に負うところが大きかったことが、長崎市民の対米感情を複雑なものにしていることは否めなかったとも記していることに注意したい。「ましてや長崎のキリスト教会は彼らと同じ宗教を共有しているものであり、その感情は戦後のキリスト教ブームは米国という勝者の宗教が、それ以前とは全く異なった新しい価値観を日本にもたらしたことによる憧れと、同時にコンプレックスが複合したものであった。この故に、原爆投下という事実が単線的に反核・平和と反米への路線に長崎のキリスト教会を導かなかつたことは当然でもあった。米国駐留軍が長崎のプロテスタントキリスト教会の復興に大きな貢献をしたことは一部記したが、卑近な例からも長崎のプロテスタントキリスト教会（界）と米国軍政府との親密な関係がうかがうことができる」²⁶と記しており、被爆直後、戦直後の長崎市民の一般的な感情とキリスト教学校、教会との受け止め方の間にその様な乖離があったことを伺わせる。

また長崎のキリスト教会についてはどうであったか。「駐留米軍は敵対すべき支配者＝勝者ではなく、復興を力強く支援する友人でさえあった。それは百年近くにも及ぶ米国プロテスタント教会との深い関係が、彼らを異質な他者として見ることからある程度解放してくれたからであった。したがってまず目指されたことは「和解」であり、原爆投下国に対する糾弾ではなかった。もちろんその背景にはGHQによるプレス・コード発令（原爆及び連合国に関わる批判的言論の禁止）が大きな影を落していることは否定できない。しかしそれにしても米軍＝米国を心理的に受け入れる素地は長崎のプロテスタントキリスト者には十分あったと言ふべきだろう。そして米軍＝米国も彼らを敗者とみなさない余裕があった。双方は力をあわせて長崎の復興に向かった」²⁷といえる。

ともあれキリスト者にとって、まずは教会の再建が急務であった。

6. ララ物資とキリスト教世界

戦後直後の日本にとって最優先の課題の一つは危機的な状況におかれた食料や衣料であった。この時に実施された援助がララ物資である。ララ物資とはLARA (Licensed Agencies for Relief in Asia、アジア救援公認団体またはアジア救済連盟) が提供した日本向けの援助物資のことである。1946年1月22日にサンフランシスコ在住の日系アメリカ人浅野七之助が中心になって設立した「日本難民救済会」を母体としたものである。知日派のキリスト友会員の協力によるところが多いとされる。1946年11月から52年6月まで行われ、重量にして3300万ポンド余の物資、その内訳は食料75.3パーセント、衣料19.7パーセント、医薬品0.5パーセント、その他4.4パーセントであり、推定で当時の400億円という莫大なものであった²⁸。

この「ララ物資の配分に関しては、一部キリスト教関連の施設が拠点となって行われたという事実」²⁹があると指摘される。『長崎新聞』（1948年1月16日）の記事は「第9回ララ物資県から聖母の騎士団に配分」とあり、「総司令部顧問ヴィーナス博士は、活水、海星、常清、鎮西学院、純心女学校を視察し、宗教家と懇談の時を持ったこと³⁰が報じられている。

このような状況は一般的にキリスト教会と関連組織・施設が物質的には「恵まれた環境」にあったことを指摘している。また長崎バプテスト教会の状況について次のようなことが記されている。

「戦争が終わりましてから、教会は息を吹き返して盛んになっていくわけです。教会員たちもボツボツ戻って参ります。そしてもう一つ印象的であったのは、教会には物があつたということです。戦後、アメリカ軍が真っ先に教会を訪問してくれたのを覚えています。チャプレン、或いはバプテストの牧師であった人が、タバコとかキャンディーとか、そういう物を持って教会を訪問して来ました。それから一、二年しましたら、教会に組織的に物資が運ばれて来るようになりました。衣料品と言いますと古着です。アメリカ人の着ている下着。それから軍服に使っていたシャツだとかズボンだとかどンドン来るわけですね。他に女性服、子供服、そしてこちら側には缶詰、コーンビーフ、だとかソーセージの缶詰などがズラツと並ぶのです。私はこれがどのような形で配られたのか良くわかりませんが、ただそれをめぐって教会では醜い争いが起こつたのを覚えております。」³¹

キリスト教国であり戦勝国のアメリカのこのような援助が当時の日本社会にあって、キリスト教会・学校がどのような位置にあったか明確になる事例である。当時、信徒であった川野正七は長崎古町教会に出席していた。彼はこの時期の教会の状況について戦時下に見慣れない出席者が憲兵であったこと、「戦後になると世間のキリスト教に対する態度は一変し、『ライスクリスチャン』なる語も生まれ、クリスチャンのふりをすることで進駐軍の米人の恩恵に浴しようとする人が増えた」と記し、「戦勝者の宗教を知ろうとする者、天皇崇拜の崩壊した空虚をキリスト教によって埋めようとする者、更には窮迫と絶望のなかで心の拠り所を求めようとする者」などで教会に出席する、人の数は増加した³²と記している。

ララ物資とこれらを求める人々、これらを配分する機会を持った教会と関連施設が、キリスト教プームの一部を構成していたからである。

長崎では、1947年10月20日県庁からララ物資の配分の通知が伝えられた。10月24日長崎市常盤町の倉庫において各学校の責任者に渡された。品物の配分はくじ引きではなく実際に困っている人が対象であった。

また12月4日には連合軍恵与の乾電池が配給され、活水女学校には3梱包の配分があった。こういう政府機関によるものとは別に、活水女学校ではアメリカのメソジスト教会から数回にわたって衣料、靴、および食糧が贈られて来た。職員生徒の中で特に困窮している者を始めとして卒業生や保護者にまでも分けられた。ほとんどが中古品であったが感謝された³³とある。

7. 青山武雄牧師のこと—馬町教会・長崎 YMCA・長崎外国語学校（現長崎外国語大学）のこと

すでに述べたように長崎にはともにメソジスト系の活水女学校、鎮西学院があったが、戦後まもなく長崎に新しくキリスト教系学校が生まれた。これが現在の長崎外国語大学である。これには以下に述べる青山武雄という人物を抜きに語ることはできない。

以下、その概略を記す。青山武雄は1906年に生まれ、同志社大学専門部神学科を卒業後、戦時下には長崎馬町教会の牧師でありつつ、42年4月からカトリック系の長崎東陵中学（現・長崎南山学園）に勤務し、戦後は校長代行を務めた。彼は敗戦直後の45年12月に長崎馬町教会に休止していた長崎 YMCA を再建して教育部門を創設し、長崎古町教会、銀屋町教会を会場として市民を対象とした英

語講習会初等科・中等科を、2月からは中学あるいは女学校の卒業生を対象に受験科を設け、修復された馬町教会に教室を移転して新たに婦人教養科を開講した。彼は長崎馬町教会の牧師としては46年に辞任し、47年4月30日に3年制の各種学校として長崎外国語学校設立し、これが母体となって50年に長崎外国語短期大学となり学長のちに理事長となった。51年3月学校法人長崎YMCA学院として改組され、60年2月に長崎学院と改称した。彼はのち日本ユネスコ国内委員のほか、長崎ユネスコ協会会長、長崎北ロータリークラブ会長、地方労働基準審議会会長、社会福祉協議会会長などを務めた。戦後の長崎でキリスト教に基づく教育、社会の進展に貢献した人物である³⁴。彼のことについては一部にその強烈な個性について論じた人々もいた。

8. 長崎平和記念教会の創立

長崎平和記念教会は1950年10月15日にYMCAでの創立総会においてその歩みが始まり、51年1月3日にベスト宣教師を初代牧師として創立した。その経緯は以下の通りである。日本基督教団復興委員のガーブ博士と木村蓬伍が長崎を訪問し（この詳細な経緯は『日本基督教団史資料集』から確認することができない）長崎の牧師と協議懇談がおこなわれ原爆落下中心地に記念教会を設立することが決議された。続いて市内の5つの教会の牧師と信徒代表（長崎銀屋町教会、長崎馬町教会、長崎教会、長崎古町教会、鮑の浦教会）によって記念教会建設委員会が組織された。代表は前長崎銀屋町教会牧師で活水女学院宗教主任吉見信が就任した。またその後、土地の取得、資金の確保で難渋を重ねたが、50年になって（確認・MGに勤めていたミス・ギールが300ドルを献金したことによって教会の敷地150坪が確保された。その後募金は連合婦人会、連合青年会と各教会などによってなされた。1952年までアーネスト・E・ベスト牧師は友愛館の館長も務め、第2代牧師として安藤肇が就任した³⁵。

このように長崎平和記念教会の創立は極めて特異なものであった。「最初は少数の信徒の集會が始まり、それを核として伝道所が誕生し、やがて成長して教会を設立するという経緯を辿る」のに対して、この場合は「まず教会設立の計画があり、教会を設立した後で教会員が出来て行った」³⁶のであり、長崎市内の5つの教会と教団が生み出したのであった。この教会は日本基督教団が設立した最初の教会のひとつであろうと記している。

9. 長崎 YMCA

長崎に YMCA が設立されたのは 1884 年であったが 1930 年以後は休止状態であった。敗戦後間もない 1945 年 11 月に、当時長崎馬町教会牧師であった青山武雄を中心にこの教会を長崎 YMCA 仮事務所として「長崎基督教青年会」の看板を掲げて活動を開始した。46 年 1 月に「英語講習会」、続いて 2 月には「婦人の英会話と基礎講座」と「高校受験講座」も始まった。同じころ長崎市内の主だったキリスト者が集まり、「長崎基督教青年会常任委員会」を設立し、英語講座を画工組織にすること、長崎 YMCA 会館の建設をすすめることを決定した。こうして 47 年 4 月に「長崎外国語学校」を設立した。教員らは主に長崎経済専門学校、長崎医科専門学校の教師を中心に帰任したアメリカの宣教師たちであった。そして 49 年 10 月には財団法人長崎 YMCA を設置者として長崎外国語短期大学設置認可がおりた。長崎 YMCA はこれ以外にも 46 年 4 月から教養講座、レクリエーション講座、音楽会などを催し、軍政府からもニプロ教育官、メダール補佐官が指導者として参加するなど、原爆の被災を受けながら戦後まもなく YMCA は活発に活動を展開して行った。このなかでとりわけ現在の長崎外国語大学、設立当時は長崎外国語短期大学の設立に青山武雄が大きく関わったことが指摘できよう³⁷。

(補論) 永井隆のこと

長崎の原爆に関しては有名になった永井隆のことを補足として述べる。彼は(1908. 2.3-51.5.1) 長崎医大を卒業後も医大で放射線医学を専攻し熱心なカトリック信徒森山みどりと結婚したことで洗礼を受け聖ヴィンセント布教宣教会会員となった。長崎医大教授として X 線撮影の仕事をしたため 45 年 5 月頃白血病にかかり、あと 3 年の命と診断された。8 月の長崎原爆投下後は自身の負傷をかえりみず他の被爆者の治療のほか、死体捜し、火葬に当り、妻の遺骨も自らの手で埋葬した。その後も被爆患者の身をおして、他の被爆者の治療を続けながら細かく原爆症を観察研究。46 年 11 月白血病で動けなくなると浦上教会の信徒たちが寄贈した小屋〈如己堂〉(によこどう)に愛児 2 人と住み、『花咲く丘』(49)、『いとし子よ』(48)、『亡びぬものを』(48)、『この子を残して』など数々の名作を発表し、「長崎の鐘」という映画や歌が作られて大きな反響を呼んだ。また原爆被災地の子供のために設けた「うちの本箱」は、現在長崎市により永井記念図書館として運営されている。また 83 年に「この子を残して」が映画化された³⁸。彼は原爆投下を肯定していたとされ、戦争責任論のなかではあまりにも高名であった

ためその評価は難しいといえる。

10. まとめ

この論文の課題は、冒頭に紹介した安藤肇の指摘にあるように戦後の日本のキリスト教会がキリスト教の信仰の根本である神への信仰と、日本という国家、その意味するところが天皇への忠誠といわないまでも、当時は日本の臣民、国民のひとりとして、敗戦をどのように受け止めたのかを問うことであった

ここで取り上げた長崎の場合は原爆によって壊滅的被害を受けた。それは教会も学校も同様であった。このことについて紹介したように一般の市民においても反発や憎悪も目だったものはなかった。根本的には戦後の占領軍の統治について一部に言及はされているものの、われわれの間に答えるものではない。GHQによる報道管制（プレスコード）による統制があったにせよ、他方では学校も教会も連合軍、そしてアメリカの教会との関係を急速に回復した。それは「勝者・敗者」の区別なしにと受け止められ、これからは「和解」と述べた。確かにキリスト教（界）は、おそらくは他の地域と同様に長崎でも優遇された存在であったと言えよう。

戦後の復興、再建をという場合でも、安藤が指摘しているようにかつては国家神道に従属し、次には占領軍とアメリカの教会がいう平和、民主主義に追随するだけであったとしたならば、どこに日本のキリスト教、キリスト者としての主体性があったのか、そしてこの戦後の歩みのなかで、いつからその営みが始められたのか、という課題であろう。

その意味は、日本に種が播かれて日本で生育する日本のキリスト教（界）としての課題がここにあるということであろう。そして長崎においては、この状況のなかで長崎平和記念教会という新しい教会を生み出し、現在の長崎外国語大学を生み出した。

ここで問おうとするわれわれの課題の中心は、もちろん当事者である日本のキリスト教への信仰とその有り様を問うことである。その意味は個別日本の近代の歴史のなかで成立した日本のキリスト教を問うことである。そして実は日本以外においても例えば日本の植民地統治のなかに置かれた朝鮮半島や台湾におけるこの時代の教会の信仰、あるいはさらに視点を広げて第二次世界大戦後のアジア各国のキリスト教会がどのような状況におかれて、どのようにキリスト教の信仰を持っていたのかを問うことへと広げることができるはずだ。もちろんここで言及

することはできないものの、同じようにミッション・フィールドにあるそれぞれのキリスト教の信仰の位相を問うべき課題を問うことの意義があろう。

(本稿の執筆にあたっては、小西哲郎教授(長崎外国語大学教授)から大量の資料の提供を受けた。記して謝意を表す)

〈註〉

- 1 『靈南坂教会 100 年史』、433～4 ページ、1979 年。
- 2 長崎キリスト者平和の会、1959 年。この本は 2005 年に復刻された。ここではこの復刻版を参照する。日本のキリスト教の戦争責任に関する本は、森岡巖『キリスト教の戦争責任 日本の戦前・戦中・戦後』1974 年、教文館を参照のこと。
- 3 前掲書、84 ページ。
- 4 前掲書、84 ページ。
- 5 前掲書、84 ページ。
- 6 前掲書、85 ページ。
- 7 前掲書、86 ページ。
- 8 前掲書、84 ページ。
- 9 『高知教会百年史』、1985 年。
- 10 前掲書、228 ページ。
- 11 前掲書、230～231 ページ。
- 12 『原市教会百年史』、1986 年。
- 13 前掲書、285 ページ。
- 14 甘楽教会所蔵資料。
- 15 『長崎県』、『日本キリスト教歴史大事典』、1988 年、教文館、981～982 ページ。
- 16 『ナガサキは語りつく』(長崎市編長崎国際文化会館監修)、1991 年、175 ページ以下。
- 17 『長崎市政 65 年史』(後編)、968 ページ。昭和 34 年 3 月 31 日には「占領軍統治」という章のなかの「終戦と進駐」という項目からの引用。
- 18 前掲書、968 ページ。
- 19 『活水学院百年史』、昭和 55 年、231 ページ。
- 20 『～歴史と交響～活水学院と長崎プロテスタント教会の百二十年』、活水同窓会、2025 年、213～215 ページ。
- 21 『～歴史と交響～活水学院と長崎プロテスタント教会の百二十年』、活水同窓会、2025 年、218 ページ。
- 22 前掲書、218～219 ページ。
- 23 前掲書、219 ページ。
- 24 『活水学院百年史』、248～249 ページ。
- 25 前掲書、248～249 ページ。
- 26 『長崎銀屋町教会百年史(第二部)』、2012 年、76 ページ。
- 27 『長崎銀屋町教会百年史(第二部)』、2012 年、63 ページ。
- 28 Wikipedia による。

- 29 『長崎銀屋町教会百年史・第二部』、2012年、80ページ以下。
- 30 『長崎銀屋町教会百年史・第二部』、2012年、80ページ。
- 31 『長崎銀屋町教会百年史・第二部』、2021年、80～81ページ。
- 32 『長崎古町教会六〇周年記念誌』、昭和55年、32ページ以下。
- 33 『活水学院百年史』、259ページ。
- 34 「青山武雄」、『日本キリスト教歴史大事典』、1988年、教文館、23～24ページ。
- 35 『長崎銀屋町教会百年史・第二部』104ページ以下。
- 36 『長崎平和記念教会四十年の歩み』、1991年、47ページ。
- 37 松本汎人、『長崎 YMCA 戦後35年の歩み～組織と施設、喪失と再興の物語』（私家版）、2011年、20～21ページ。
- 38 「永井隆」、『日本キリスト教大事典』、1988年、教文館、973ページ。

